

第3表 気象統計 (米版水路誌 H.O. No. 20, No. 126 による)

サリナ・クルス

	気 温			平 均 湿度	雨 量 平均	風			晴 曇 雨 平均 日 数	平 均 雲 量		
	平 均	最 高 平均	最 低 平均			平 均 風 速	最 大 風 速	最 多 風 向				
2月	°F 77	°F 84	°F 71	% 63	mm 10	m/s 9.2	m/s 34	北	日 22.9	日 0.6	日 1	2.0
3	79	85	73	64	16	8.9	36	北	22.9	1.0	1	1.9
4	81	87	76	67	12	8.9	34	北	22.0	0.6	2	2.8

ベラ・クルス

	気 温			平 均 湿度	雨 量 平均	風			雲量平均日数		
	平 均	最 高 平均	最 低 平均			静 穏 平均 日 数	風 力 6 以上 平均 日 数	最 多 風 向	1	3 以下	7 以上
2月	°F 71	°F 76	°F 67	% 83	mm 16	日 10	日 4	北 東	日 6	日 7	日 10
3	73	78	69	83	7	10	3	北	5	9	8
4	77	81	73	81	20	10	0	東	5	10	6

荷揚げして、同地からコロンビア船の月1回の便に積みかえることになる。

3. 世界時への補正

以上の日食予報値は、水路部の昭和45年天体位置表(今年11月発行)の計算原稿によった。この計算には暦表時 ET および暦表経度を用いているから、これを世界時 UT に改めるために、 $AT=ET-UT=+39^{\circ}0$  を

仮定した。地理経度は、暦表経度に  $1.00273794T/15$  (角度の秒)を西経の場合には加え(東経の場合は減じ)たものである。この  $AT=+39^{\circ}0$  という補正值は 1955~1956年の日本における掩蔽の光電観測および同期間における積算原子時と世界時との差を国際報時局(BIH)でまとめた結果を総合して推定したもので、理科年表・天体位置表・天測暦・天測略暦の1970年用の編集に採用している。

雑 報

**中性子星? パルス状電波源** ケンブリッジ大学(英国)でラジオ星の惑星間空間でのシンチレーションを観測中に、非常に規則正しいパルス状の電波を出す全く新種の電波源を発見した。パルスのくり返しは、1.37...秒と  $10^{-7}$  くらいの精度で一定である。その後の観測でパルスの周波数が高い方から低い方にドリフトすることが見出され、周波数範囲も 50MHz から 1420MHz まで観測されるようになった。

周波数範囲が非常にせまければ、なにか人工的なもの(宇宙人同志の通信)という解釈も強くなってくるが、このような広い周波数範囲をカバーする通信というのは考えにくい。結局、これくらいの周期で脈動すると考えられる中性子星ではないかと想像されている。

周波数のドリフトから距離が(200光年以内)、パルス

の性質から電波源の寸法(1000km くらい以内)が推定され、ますます、なにか星のようなものから出ているということがたしかになってきている。

さらに、非常にくわしく測られた天球上の位置に、ライル等は 18等の青い星があることを(パロマー掃天写真上で)認めた。これが中性子星かどうか、それどころか、これが謎の電波の犯人かどうか、まだわからない。今後の発展が期待される。(森本)

**第3回地球および惑星の内部構造研究会** 京大基礎物理学研究所と、東大宇宙研究所との共催による地球および惑星の内部構造研究会が3月19日より21日まで、京大基研において開催された。(第1回は1966年1月12日~15日、第2回は1967年3月16日~18日で、本誌60巻6月号雑報欄に紹介記事あり。)参加者は約60名。

この会は、いわば日本流の太陽系起源論を集団的に建設しようという目的が強く前面に押し出された会で、その骨子は上記の天文月報記事、または岩波の「科学」

1967年10月号に詳述されている。第1回会合で大筋がで  
き上り、第2回会合でそれを確認した形で、第3回は付  
随する問題を論じたようなふんい気が濃かった。(関口)

**新彗星 1968 a の発見** 昭和43年4月26日朝、山形市  
の板垣公一氏はペガサス座に光度8等の新彗星を発見し  
た。独立発見者は板垣氏のほか5名にのぼった。その氏

名と発見時刻(5月1日, 中央標準時)は次の通りであ  
る。多胡昭彦氏(2時50分), 佐藤安男氏(3時56分),  
本田実氏(3時45分), 藤川繁久氏(3時56分), 山本博  
文氏(4時5分)。初期の観測から求めた放物線軌道要素  
は,  $T=1968V 16.48$ ,  $q=0.679$ ,  $\omega=50.9$ ,  $\Omega=232.2$ ,  $i=$   
 $101.8$  (1950.0) である。

## 学会だより

☆ **会費値上げの件** 今般物価昂騰その他の事情によ  
り、会費を値上げせざるを得ない事態になりました。昭  
和43年4月18日の評議員会で本会定款の細則変更が行  
なわれ、昭和43年度より会費を次のように改訂するこ  
とになりましたので、お知らせいたします。

特別会員 2100 円を **3200 円**に変更  
通常会員 800 円を **1000 円**に変更

☆ **会誌値上げの件** 会費値上げにともなって、本会  
会誌の販価も次のように改訂いたしました。

天文月報 1部 125 円 (43年7月号より)  
欧文報告 1部 1100 円 (20巻1号より)  
(共に送料を含む)

☆ **会誌のバックナンバー** 天文月報および欧文報告  
のバックナンバーの頒価を、5月1日より次のように変  
更いたしました。

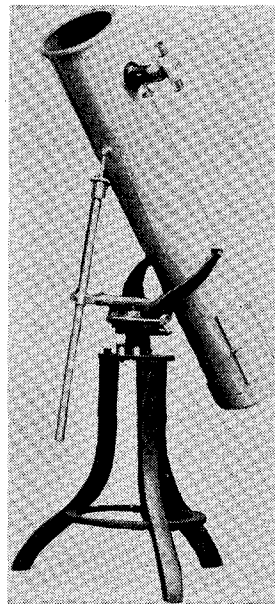
天文月報 1部 125 円  
欧文報告 1部 1100 円 (共に送料を含む)

なお、天文月報バックナンバーは、1962年10月号の  
月報誌上で価格をお知らせした後、1965年2月に価格改  
訂をいたしました。その広告が月報誌上を通じて行な  
われなかったため、利用者各位に大変御迷惑をおかけし  
ました。ここに深くお詫びいたします。

☆ **天文学会要報バックナンバー** 昭和5年より昭和  
16年にわたって刊行されました日本天文学会要報のバ  
ックナンバー(1~23号)に残部がございます。御希望の  
方にはお頒けしたいと思いますので、代金(1部200円  
郵送料共)をそえてお申し込み下さい。ただし14号~  
21号および23号の在庫数は非常に少ないので、予めお  
含みをお願いします。

## 内容の一部

著者	題 目	掲載号
萩原雄祐	万有引力法則の吟味	1
平山清次	恒星の進化について	2
栗原道徳	カルシウム彩層の理論に就き	9
清水 彊	銀河系外星雲に関する統計	10
藤田良雄	水素の豊富なる星の大気にお ける二原子分離の解離	13
鈴木敬信	ノモグラフによるケプラー方 程式の解法	17



### 天体観測用 凹面鏡

口径 8 cm ~ 30 cm  
焦点比 1:10 ~ 1:3

### 屈折対物レンズ

口径 8 cm ~ 15 cm  
焦点比 1:15 ~ 1:11

### 接 眼 鏡

オルソー 5mm 9mm  
ケルナー 12.5 25 40

### 太陽観測用

M. H. 12.5 18 25  
10. cm 12. 15.

経緯台完成品  
その他光学部品  
金属部品

カタログ御希望の方  
は郵券35円お送り下  
さい

有  
限  
会  
社

足立光学レンズ製作所

東京都武蔵野市関前5-3-11

TEL 0422 51-8614 振替41970

昭和43年5月20日

印刷発行

定価 100 円

編集兼発行人 東京都三鷹市東京天文台内

印刷所 東京都文京区水道2-7-5

発行所 東京都三鷹市東京天文台内

電話武蔵野 45局 (0422-45) 1959

広 瀬 秀 雄

啓文堂 松本印刷

社団法人 日本天文学会

振替口座東京 13595